ラリグラス・ジャパン News Letter

#05
2021
6月号

春の訪れを祝うホーリー祭。マイティの子どもたちも、色粉を塗りあったり色水を掛けあったりして、コロナ禍のストレスを発散した。

目に鮮やかな新緑の季節となりました。新型コロナウイルスの影響で大変な状況ではございますが、皆さまにおかれましては、お変わりなくお過ごしでしょうか。

ネパールの新規感染者数のピークは10月22日でした。4月7日現在の1日平均人数は約189人と、ピーク時の5%まで減少しましたが、ふたたび増加傾向にあります。また、インドは3月に入り、爆発的な増加を見せています。

ネパールでは、インドから無償提供を受けた100万回分を使い、1~2月にかけて医療従事者を中心に43万人にワクチン接種を行いました。今後さらに調達を進め、人口約2900万人の7割への接種を目指しています。インドも1月から医療従事者や50歳以上の人、基礎疾患のある人を優先し、夏までに人口13億5000万人の2割に当たる3億人に接種する計画です。しかし、マイティ、NDWS、RFのスタッフや女性と子どもたちに行き届くまでには、まだまだ時間がかかりそうです。

そうした中でも、私たちの現地の仲間は、精一杯、活動を続けてくれています。現地訪問の目途が立たず、歯がゆいばかりですが、遠く離れていてもできることを、可能な限り継続していく所存です。現地団体の活動を支え、女性と子どもたちの幸せを創るために、これからもご協力いただけますようお願い申し上げます。

認定NPO法人 ラリグラス・ジャパン
〒108-0072 東京都港区白金3-10-21　TEL&FAX 03-3446-2193
E-mail:info@laligurans.org　http://www.laligurans.org

現地活動報告　マイティ・ネパール

夫を病気で失い、ふたりの子どもを抱えるスナールさん（38歳）は、日雇い労働で家計を支えてきた。建築現場で石や砂を運ぶ仕事は重労働だが、得られるのはネパールの最低賃金（月額1万4000ルピー）にも満たない月1万ルピー。食べていくのが精一杯だったところへ、新型コロナウイルスが打撃を与えた。感染拡大を防ぐため、昨年3月22日から4カ月間続いたロックダウンにより、職を失ってしまったのだ。

スナールさん一家のような貧困家庭は、日々の糧もままならない状況に陥った。政府は豆や米などの食料を配給したが、たった2週間分ではとても糊口はしのげない。そこでマイティは、6月に「キッチン・プロジェクト」を立ち上げ、貧困家庭の女性と子どもに栄養価の高い食べ物を提供することにした。

プロジェクトの開始前、調理補助のスタッフを募集した。スナールさんも応募した。コックの経験がない点が憂慮されたが、彼女のやる気を認めたアヌラダさんが雇用を決めた。感染予防に努めながら、毎日、250人を超える人々に食事を供給する仕事は容易ではなかったが、誰よりも積極的に働くスナールさんは信頼を獲得し、プロジェクトの中心人物として認められることになった。

「自分には何の力もないと思っていましたが、自信がつきました。努力すれば、私にもできる仕事があるとわかったのです。私を信じ、仕事を提供してくれたマイティに感謝しています」と話すスナールさん。物資だけでなく、彼女の人生に希望も与えられたようである。そんなキッチン・プロジェクトの受益者は2000人に達し、今後も継続される予定である。

2015年に発生したネパール大地震の後、人身売買犯罪が急増した。家や職を失った被災家庭に仕事を紹介すると持ちかけ、多くの少女や女性が犯罪に巻き込まれたのだ。昨春から続いているコロナ禍においても同様の現象が認められている。

ネパール政府は、女性の中東への出稼ぎを禁止しているが、斡旋業者が多くの人を送り出している。たどり着いた先で約束どおり仕事が得られることもあるが、経由地のインドで売春宿に売られるケースも少なくない。昨年末、そうした女性5人がハイデラバードの空港で足止めされた。出国手続きの際、必要書類に不審な箇所があったため、事情聴取したところ、斡旋業者に騙されていることが発覚したのだ。ネパール政府のガイドラインに従って本国に送還された5人は、マイティに保護された。カウンセリングを受けた後、家族のもとに送り届けられたとのことだが、同様のケースは目に見えて増加しているという。

空港で救出された５人

コロナ禍による経済悪化に伴い、児童労働問題も深刻化している。ニタさん（14歳）は、西ネパール・バルディヤのレンガ工場で、児童労働者として違法に働かされていた。継母に虐げられた挙句、仕事を強制されたという。こうした弱い立場に置かれる子どもや女性を守るため、マイティは啓発活動により力を入れている。そのひとつが、毎週水曜日18時から放送される「マイティ・コ・サンデーシュ」というラジオ番組の制作だ。被害者の実体験を紹介し、人身取引に巻き込まれないよう注意を促すというものだ。被害者の多くが、「私たちのような目に遭ってほしくない」との思いから、インタビューに協力してくれているという。勇気ある行動に敬意を表したい。

災禍というものは重なる時に重なる。2020年9月8日、連日の豪雨により、ヌワコット郡インドラヤニ村で大規模な地滑りが発生したのだ。幸い、亡くなった人はいなかったが、115世帯が家を失い、2・5ヘクタールの農地が消失した。

被災者は、今もテント生活を余儀なくされている。マイティは国連とともに、米、ヒラマメ、塩、食用油、茶、砂糖などの配給を今も続けているが、被災者の不安は尽きない。被災地では多くの地割れが起きており、6月から降雨が始まれば、再び地滑りが起きることが懸念されているのだ。コロナ禍、自然災害と苦難続きのネパール。私たちも可能な限り、支援を続けていく所存である。

マイティスタッフによる配給

テント生活を強いられる被災者

レスキュー・ファンデーション

新型コロナウイルスの感染者が世界で3番目に多いインドが、第2波に見舞われている。一時、新規感染者数は減少傾向にあったが、3月に入ってから急増。4月4日発表の新規感染者は9万3000人を超え、2020年9月のピーク時と同水準に達した。とりわけ、RFが本部を置くムンバイがある西部マハラシュトラ州の感染状況が深刻で、インド全土の新規感染者の過半数を占める状態だ。そのため、4月5日から同州では夜間の外出制限など、厳格な行動規制が始まった。

2月下旬、RFから緊急支援の要請があった。これまで、ムンバイの本部とシェルターの年間運営費をサポートしていたオランダのNGOから、支援の一時中止の申し出があったという。コロナ禍の影響による団体の資金難が理由とのことだ。ムンバイのシェルターには、常時100人前後の被害者が保護されている。そのひとりひとりに衣食と医療ケアを提供し、基礎教育や職業訓練を行っているのだが、この費用を賄えなくなったのである。こうした実情を受け、ラリグラスは、「コロナ緊急支援」として150万円の追加支援を決定した。

行動規制やドナー資金難の中、RFは精力的な活動を続けてくれている。もっとも重要なミッションとされる救出活動を、3月中にムンバイで2回行い、1回目は10名の少女を救い出し、売春宿関係者7名を逮捕。2回目は20名を救出し、3名を逮捕した。同様の救出活動は、RFのプネー事務所とデリー事務所でも行われており、いずれも大きな成果を上げている。限られた予算と行動制限の下、コロナ感染のリスクを負いながら活動に取り組むスタッフたち。その功績が評価され、国際婦人デーの際、女性と子ども開発省より表彰された。

RFの活動は、インド国内で徐々に認知されてきており、さまざまな形で支援の申し出があるという。例えば、食品卸業者からは、米や小麦粉、豆などが定期的に寄付されており、製菓会社は女の子たちにチョコレート作りを指導してくれたそうだ。閉塞感漂う昨今、大好きなお菓子を自分の手で作ることができ、一大イベントになったとのことである。

◀チョコレートのお菓子作り

女性と子ども開発省より表彰

ネパール障がい者女性協会（NDWS）

ネパールはロックダウンが解除され、滞っていた障がい者への支援も再開されつつある。1月18日に、NDWSはバグマティ村役場と共催で、グセルという地域の障がい児・者への松葉づえや歩行器等の補助器具の提供と、障がいの啓発活動を実施した。15人の障がい児・者の調査を事前に実施し、障害に応じた補助器具を提供することができた。村長や村役場の職員が参加する中、NDWSのスタッフが障がい児・者を取り巻く状況について説明するとともに、当事者もその窮状を訴えた。村長は、その場で同村の他地域においても同様のプログラムを実施することを約束した。

ラリグラス・リポートでお伝えした農業プロジェクトにも進展があった。NDWSは、障がいのある子どもたちが成人した後に活動できる場所を確保すべく、保護者とともに実施できる職業訓練を模索してきた。これまで、停電が多いネパールならではのろうそく作りや、保護者向けの仕立てのトレーニングなどを実施している。新たに、NDWSのスタッフが農地を無償提供し、障がいのある青年と保護者が農作物を育てる試みが始まった。まずは住み込みで農地の世話をできる家族を探していたところ、両親と娘・息子の4人家族が手を挙げた。娘と息子はいずれも知的障がいと視覚障がいを持ち合わせている。すでに高齢の両親は別の場所で小作人として農業をやっていたそうだ。NDWSにて準備した農地のすぐそばの宿舎に家族で引っ越し、住み込みで農作業を行っている。NDWSは苗や種、農機具等必要な機材を買いそろえた。すでに米やトウモロコシ、ジャガイモ等を植えており、成長の早いトウモロコシは収穫できそうなほどまでになっている。収穫した農作物は販売し、新たな苗や機材の購入に充てる。今後、NDWSのデイケアセンターに通う青年たちもこの農地で農作業を行い、自立に向けた一歩を踏み出す予定である。

田植え作業をする一家

補助器具の受け渡しの様子

委託販売

関 智美 さん

委託販売を始めたきっかけは？

早稲田大学本庄高等学院の生徒だったときに、学校のスーパーグローバルハイスクール（SGH）活動の支援をラリグラスがしていました。SGH活動として、文化祭で3年ほど委託販売をしていて、最初はプロジェクトの流れとしてやるのだと漠然と考えていました。ですが、夏のスタディツアーに参加して、SGH活動の参加者としての義務感ではなく、自分の意思でやりたいと思う心境に変化していました。私にとって委託販売をすることは「恩返し」でした。

スタディツアーに参加した経験は、人生を変え、自分の生き方を考える上で大きな意味のあるものになりました。ネパールの少女や女性、子どもたちに会って、彼らの背負うバックグラウンドを通じて、自分がこれから先どうありたいのか、真剣に考える機会をくれたからです。そんな機会をくれた人たちにほんのわずかでも恩を返したいし、少しでも力になりたい、そんな気持ちで活動をはじめました。

どのように販売をされていますか？

学校の文化祭で特設ブースを作り、パネルを使いながら活動紹介をし、販売しました。地域の高校が協力して行う「六甲祭」でもブースを出し、販売しました。

委託販売のやりがいは？

こんな自分でも、ネパールで出会った人たちの人生をいい方向にほんの少しでも変えられるのではないかという思いがやりがいでした。スタディツアーで出会った方々にたくさんのものを与えてもらったから、それには遠く及ばないけれども、集まった利益やお客様に活動を知ってもらったことが、ほんの少しでも支援に繋がっていればいいなと思います。これからも支援を続けたいと考えています。

Information

ブライダル基金

レスキュー・ファンデーション（RF）では、人身売買の被害者の女性の自立支援のひとつとして、結婚を望む男性との縁組を行っています。インドでは、金のアクセサリーやサリー、日用雑貨を嫁入り道具として持参しており、一人当たり7～9万円の費用がかかります。また、挙式費用として13～15万円ほど準備しなければなりません。そこで、当会では『RFブライダル基金』を設け、結婚式にかかる費用を、**一口 1,000 円**としてご協力いただいています。

美しく着飾った花嫁

コロナ対策プロジェクト

コロナ禍により、社会的弱者はさらなる窮地に追い込まれています。もっとも打撃を受けたのは低所得者層です。

人身売買犯罪が起こる原因の1つは貧困です。自然災害後、人身売買犯罪が増加するといわれていますが、今回のコロナ危機後も女の子たちが児童労働や強制売春の犠牲になる危険が高まると予想されます。

現地のパートナー団体は長年培ってきたノウハウを生かし、素晴らしい活動をしてくれています。そうした彼らの活動が滞ることのないよう、「コロナ対策プロジェクト」としていただいた寄付金は、生活困窮者への支援物資および感染予防の啓発キャンペーンの費用に充てさせていただきます。**一口 1,000 円**としてご協力をお願いいたします。

お菓子プレゼント

マイティの女性や子どもたち、NDWSの子どもたちは、貧困家庭の出身者が多く、お菓子を食べる機会が滅多にありません。そこで年2回のお楽しみ企画として、20年以上にわたり、お菓子の詰め合わせプレゼントを続けてまいりました。昨年7月と今年3月も、現地スタッフのラジャさん一家にパッキングをお願いし、無事に配布。今後も継続予定です。**一口 1,000 円**の寄付をお願いいたします。

振込先はこちら!

郵便振替

口座番号：00100－5－713661
加入者名：トクヒ ）ラリグラス ジャパン

※銀行振り込みの場合
銀行名：ゆうちょ銀行
支店名：0一九（ゼロイチキュ）店（019）
口座番号：当座 0713661

銀行振込

銀行名：三菱東京UFJ銀行
支店名：麻布支店（店番：570）
口座番号：普通預金 0158054
振込先名義：トクテイヒエイリカツドウホウジン
ラリグラスジャパン